



TITLE:

《主題別研究集会》大学図書館の レファレンス・サービス

AUTHOR(S):

CITATION:

《主題別研究集会》大学図書館のレファレンス・サービス. 静脩 1988,
25(3): 9-10

ISSUE DATE:

1988-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37033>

RIGHT:

《講演会》

アメリカにおける 大学図書館の現況について

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の講演会が去る9月21日、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校情報図書館学部長ロバート・ヘイズ博士を招いて「アメリカにおける大学図書館の現況について」という題目で開催された。通訳は図書館情報大学教授松村多美子氏がつとめられた。この講演会には近畿地区の20を超える大学などから80名余りが参加した。

概要：今回の講演は1986年のIFLA（国際図書館連盟）東京大会でヘイズ博士が発表した“UCLAの研究図書館における情報源に対する戦略的計画”がこの2年間でどの程度進展したか、更にこれからの見通しなどを中心になされた。

現代の図書館の直面する問題は様々あるが、中でも大規模な研究図書館のマネジメントの問題が最重要であると思われる。例えばテクノロジーの進歩につれて多種多様な情報源（Information resources）が出現して来ているがそれらをどう管理して行くかといった問題である。

上記の“戦略的計画”というのは Council on Library Resources の資金援助によりUCLAの各学部・学科で具体的にどのような情報源に対する要求があるかを調査し、これからの研究図書館のあり方について検討し一つのモデルとなるものを提供しようとするものである。これまでの調査から出て来た多様な情報源に対する要求は狭義の（伝統的）図書館の資料のみではなく、印刷物、フィルム、数値データ、デジタルデータなど殆んどありとあらゆる情報源を含んでいる。これらの要求を全学的見地から、更には外部との関係を含めてどう取り扱うかという事を検討する段階に来ている。その場合、現在の図書館の在り方もまさに“戦略的”に検討される事になろう。

《主題別研究集会》

大学図書館のレファレンス・サービス

近畿地区国公立大学図書館協議会主催の主題別研究集会が、10月7日附属図書館3階AVホールにて行われた。講師は慶応義塾大学三田情報センター情報サービス課長の東田全義氏で、17の国公立大学図書館から95名（うち京大は66名）が参加した。

まず、最近の大学図書館をめぐるトピックについて、最近とくに注目を浴びてきたILL（図書館間相互貸借）実施上の問題、特に本来受付側の事情が配慮されるべきところを、依頼者側の都合が優先されてきたこと、去年から今年にかけて、利用者教育に関する研究会が盛んになっており、単なるオリエンテーションでなく、専門課程の学生をも含めた図書館の利用技術に重点を置いた学生集団への利用者教育として位置づけられている。

次いで、レファレンス・サービスにおけるインタビュー技術が、オンライン検索の導入により、その重要性が再認識され始めたが、日本では、このレファレンス・インタビューに関する研究の蓄積がほとんどなく、研究テーマにもなかなかなりにくいことなどが、紹介された。

そのあと、オンライン・データベースについて、同じ単語でもその表記方法で検索結果の異なることが実例によって示され、同義異形、同語異義、類義語、概念の上下関係などの点で限界があり、「従来の検索よりもよくなっていると思わないほうがいい」との指摘であった。

次に、書誌学との関係にはいり、最近クローズアップされてきた目録の遡及入力項目決定に書誌学の知識が必要であるとし、書誌の二つの役割のうち、Information（情報）と Identification（識別）について、両者がレファレンス・サービスとどのような関りがあるのか、について考えたといと前置きして、モンテスキューの「法の精神」とルソーの「エミール」の原書の本版や偽版の標題紙の相違を、細部にわたって比較検討した。また、京大に実際に所蔵されている原書も実物を示

しながら、どの版に相当するのか推理し、参加者からは、その緻密さにため息がもれるほどであった。

最後に、最近、東田氏の受けた質問を紹介しながら、こうした古典の原書については、とくに版の指定の必要なきことが強調された。

《シンポジウム》

学術情報システムと ローカル目録システム

11月17日(木)～18日(金)の両日、緑深い北摂の山懐にある関西地区大学セミナーハウスで第2回国立大学図書館協議会シンポジウムが定員30名を超える35名(35大学)の参加を得て開催された。今回のシンポジウムでは、メインテーマを「学術情報システムに対応した最適のローカル(各大学図書館)システムは何か」とし、以下の4つのサブテーマごとに検討を加え、特にV T S S方式により学術情報センターと接続し、目録情報の作成、O P A C (Online Public Access Catalog)を推進していこうとしている中小規模の大学図書館システムの在り方を探求することに主眼がおかれた。先ず最初に、今年6月に出された国立大学図書館協議会 学術情報システム特別委員会ネットワーク委員会第2次報告「目録情報ネットワークの展開と大学図書館のシステム化」の概要について報告が行われ、引続き、サブテーマごとに2日間にわたる熱心な討議が行われた。各サブテーマにおける討議概要は次のとおりである。

サブテーマ1：学術情報センター目録・ソフトウェア(U I P)

学術情報センターへの登録とデータ取込みまでの取込み方法等ソフトウェアの特徴等について、各メーカーのコンピュータを導入している大学からの事例報告を中心に比較検討が行われた。

サブテーマ2：学術情報センター目録情報とローカルシステム目録情報

ローカルシステムに取込む情報量(必要な項

目と不必要な項目の切り分け)及びパッケージソフトの有効利用の必要性等について討議が行われた。

サブテーマ3：O P A Cの性能

①NACSIS-IRとの関係におけるO P A Cの必要性

②CD-ROMによるオンディスク検索との関係

③O P A Cのシステム効率等について活発な意見交換が行われた。

サブテーマ4：ハウスキーピング

システムの範囲、効率、システムへの負荷を考慮に入れ、ハウスキーピングのシステム化の現状及び問題点(課題)について検討が行われた。

以上のように今回のシンポジウムは、昨年(第1回)の経験を踏まえて、①テーマを1つにしほったこと。(テーマに関して専門の人が参加し得た)②合宿方式を採ったこと(参加者間のコミュニケーションの機会が増えた)等により、終始和やかなうちにも活発な議論が交わされ、実りの多いシンポジウムであった。

《懇談会》

情報検索・電子メールシステム に関する利用者との懇談会

学術情報センターは、情報検索システムと電子メールシステムの改善とサービスの向上を図るため、全国4地区で利用者との懇談会を開催した。

このうち、近畿地区では、12月8日に本学図書館の地域共同利用室を会場として行われ、9大学から22名の参加があった。

当日、学術情報センターから、各サービスの現状紹介、実演、利用者の意見・要望について報告の後、懇談にはいり、情報検索サービス(NACSIS-IR)及び電子メールシステム(NACSIS-MAIL)の諸機能・性能、データベースの内容、運用等について話し合われ、活発な意見交換がなされた。